

特集 立川文化芸術のまちづくり協議会

No Art, No Tachikawa

～進化する立川のアート発信力～

立川文化芸術のまちづくり協議会は、立川市文化芸術のまちづくり条例の理念に基づき、文化芸術の育つ環境づくりを目的として2009年に設立されました。アートが息づくまち・立川を長きにわたって支えてきた協議会の活動に3つのSceneから迫ります。 圏域文化課文化振興係・内線4501

繋ぎ手
高橋真理
1年前から市民ライターとして活動。等身大の視点で、まちのすてきな人や場所を掘り起こし伝える。

支え手
高木 誠
2017年から「立川ビルボード」を運営。会社役員や立川観光コンベンション協会のプロデューサー業務も行う。

作り手
tonoharuna (トノハルナ)
油絵の抽象画を中心に制作を行う。石田倉庫のアトリエで、年齢不問のワークショップを開催。

Scene 1 立川のアートシーンを深掘りするWebメディア 立川ビルボード

「情報発信で文化・芸術を応援」をモットーに、立川のアートシーンを深掘りするWebメディア「立川ビルボード」。今回は運営者の高木さん、市民ライターの一人の高橋さん、高橋さんの取材を受けたアーティスト・トノさんを迎え、アートの支え手・繋ぎ手、作り手のそれぞれの視点から、その魅力を語り合っていました。

まちに眠る才能に、光をあてる

高木：立川周辺には美大や音大があり、実は多くの実力派アーティストがこのまちを拠点にしています。でも、その活動は意外と知られていない。そんな「地域に眠る宝物」を見つけ出し、広告看板(ビルボード)のように大きく掲げたいという想いで2017年にスタートしたのが「立川ビルボード」です。

高橋：私は約1年前から市民ライターとして参加していますが、取材を通して「立川にこんなすてきな人がいたんだ!」と驚く毎日です。実は私のライターとしての初仕事が、トノさんへのインタビューだったんですね。

トノ：そうでしたね(笑)。私はここ「石田倉庫」にアトリエを構えて活動していますが、作家はどうしても制作に没頭して籠もりがちになります。自分でSNS発信もしますが、やはり限界があって。そんなときに高橋さんがじっくりとお話を聞いてくださったのが、とても新鮮でした。

倉庫から、次世代へ繋ぐ創作の場

高橋：トノさんのアトリエを取材させていただいたのは、ちょうど、子どもたちが自由に表現を楽しめる遊び場「創造遊び場」のとなり」の日で、子どもたちが思い思いに、のびのびと作品をつくっていく姿がとても印象的でした。

トノ：私自身、この歴史ある石田倉庫という場所に育てられた感覚があります。元は小麦粉倉庫だった場所を、オーナーさんが「若い作家のために」と安価で提供してくださったのが始まりだと聞いています。こうした「場」への感謝があるからこそ、次世代の子ども

たちが自由に筆を動かせる居場所を守りたいという想いがあるんです。

高木：その熱量が記事を通じて伝わるのが、このメディアの醍醐味です。当初は一人で書いていましたが、今は市民ライターの皆さんが、自分たちの等身大の視点で「まちの温度」を届けてくれる。アップ作業が追いつかないほどの熱い記事が日々届くようになり、大きな手応えを感じています。

記事でつながる、まちへ踏み出す一歩

トノ：表現者にとって、自分たちの活動を客観的な言葉で丁寧に届けてもらえることは、地域の中に「居場所」を認めてもらえるようで、本当に勇気づけられます。記事をきっかけに、展示に足を運んでくれる方が増えるのも嬉しい変化です。

高橋：長く住んでいる立川。これからも、新しい発見をし、すてきな人たちと出会い、それを読者の皆さんに届けられる「繋ぎ手」でいられたらと思っています。

高木：あまり大きなことは考えていませんが(笑)、「立川ビルボード」を入り口として、地域のアーティストや多様な文化芸術を知ってもらうことで、応援の輪が広がっていくことを期待しています。今後はSNS発信もさらに強化して、立川のクリエイティブな熱量がもっと当たり前になり、溢れ出すような、そんなきっかけをつくっていききたいですね。



立川ビルボードの3つのポイント

Webサイトはこちらから

POINT 1 人と想いにフォーカス



表現者の「人となり」や活動を支える「想い」に注目。表舞台の裏側にある物語に触れることで、まちのアートがより身近に感じられます。

POINT 2 記事は市民ライターが作成



養成講座を受けた市民ライターが取材・執筆を担当。「一人のファン」としての等身大の視点で、地域の魅力を掘り起こします。

POINT 3 まちの歴史も大切に



老舗企業の歩みやまちの変遷を記録することで、今私たちが暮らすまちの奥深い魅力を再発見するきっかけを届けます。

まちじゅうがアトリエ!

広がるアートの交流

遠くへ出かけずとも、多彩なアートに出会える立川。立川文化芸術のまちづくり協議会は、地域の知られざるスポットや才能を発掘し、交流の場をつくり出しています。情報を繋ぐことで、文化芸術が等身大で育つまちづくりを目指しています。

Scene 2 Facebookで交流する 立川アートおさんぽ部

立川の文化芸術を「おさんぽ感覚」で楽しむFacebookグループ。作品の発見や展示の感想などの投稿が日々寄せられ、「知る・観る・参加する」を合言葉に、アートを楽しむ仲間の輪が広がっています。



「まち角で素敵な作品を発見!」「あの展示、感動したよ!」といった発見や、イベント告知などの投稿が日々活発に。



参加者コメント



制作の裏側にあるこだわりや価値観を直接伺い、作品との距離がぐっと縮まりました。ただ観るだけではわからない魅力に気づけるのも交流の醍醐味。これからもすてきな作家さんたちを追いかけたいです。

Scene 3 新しいアイデアが生まれる ダイアローグ

「対話」を意味するダイアローグ。最初は小さな集まりからでも対話を重ねることを目的に始めました。表現者たちが対面で語り合い、アイデアを共有する新しい交流の場です。



SNS発信や子ども向け体験など、多彩なテーマで対話を継続。ここでの出会いをきっかけに、団体同士の新たなコラボも誕生しています。



参加者コメント



ダイアローグへの参加を機に、まちカフェでの出張ワークショップが実現し、ボランティア団体も発足しました。3月には地域の団体と連携して、ワークショップ中心のミニまつりも開催予定。ここでの出会いが活動を加速させています。

立川アートの宝庫

石田倉庫

富士見町2-32-27



かつての小麦粉倉庫を改装し、現在は10組以上のアーティストが制作に励むアトリエ群。立川の歴史が息づくこの場所は、表現が生まれる拠点としてだけでなく、子どもたちがアートに触れる交流の場にもなっています。

